

墓番号第一〇九号

矢部 忠雄

終戦後シベリアに抑留された日本軍人は約六十万、内死亡した者約五万五千名と発表されている。その中に、墓番号第一〇九号、埋葬者氏名、下山 堅（岡山）の名簿がある。

私はこの名簿を見たとき、四十九年前の昭和二十一年一月十日頃、下山氏の遺体を担架に乗せて三名の兵士と共に埋葬に行った日のことが思い出される。

場所は現在のウズベキスタン共和国アングレンである。アングレンは首都タシケントの東百二十キロ程のパミール高原の山裾にある標高千五百メートルの荒野であった。戦後ソ

連軍に捕虜としてアングレンに抑留された日本兵約六千名は、昭和二十五年迄の五年間を苛酷な条件の中で石炭の露天掘り、鉄道、道路、運河、建築などの重労働を強いられ多くの死亡者が出た。アングレンに到着してから三ヵ月後、昭和二十一年の正月を迎えて間もなくのことであった。六時起床になっても下山は起きてこない。隣りの兵士が起こしたが疲れ果てて寝ているのか反応がなかった。驚いた兵が分隊長に伝えて調べたところ既に息を引き取っていた。戸田小隊長は近藤梯団長に報告したあと下山を幕舎に残して作業出

発のため広場に集合した。雪が降り積もる中を先頭から作業場へ出発して行った。私達の第二中隊第三小队は続いて正門を出た時、ソ連兵が不意に「止まれ」と合図して「四名を残せ」と言った。小隊の一番後列に居た私と三名は残り、小隊は作業場へ進んで行った。下山氏の遺体はソ連軍医の検死が済んだあと私達四名が担架に乗せて裏山の埋葬地へ運んだ。埋葬地は五センチ程の雪が降り積って、先に埋葬された多くの墓は雪に埋れていた。私達はスコップで穴を掘り遺体を毛布に包んで安置し、遺品を並べて土盛りした上に墓標がわりの石を置いた。雪に埋れた墓地に埋葬したばかりの赤土の土盛りには雪は降り積った。私達は下山氏の墓標に別れの敬礼をして丘を降りた。